

卒業証書が届きました。学校で最も大切な行事である卒業式だけは、中止にさせないよう頑張りたいと思います。校長になつて五回目の卒業式。今回も心を込めて三年生一人一人の名前を浄書（じょうしょ）します。

いきなり卒業証書に墨を入れることはしません。まずは「察すること」から始めます。

文字には表音文字と表意文字があります。平仮名と片仮名は「音（読み）」を表す表音文字、漢字は「意（意味）」を表す表意文字です。したがって、一人一人の名に使われている文字がもつ意味を調べて、名付けた人の愛情や願いを察することができます。 「数多くある同じ音の漢字の中からこの字が使われているのはなぜだろう」と考えると、その名の尊さがわかってきます。仮名の名も例外ではありません。あえて仮名とした思いを察します。

次に取り組むのは「見直すこと」です。何度も書いたことがある漢字にも、「思い込んでいる部分」が必ずあるもの。卒業証書の浄書をきっかけに、一字一字、一画一画を再確認します。例えば「美」という字。この字には横画が四本入っています。しかし、その四本の長さは同じではありません。四本とも全て長さが微妙に異なります。それを確認した上で、何度も何度もその字を練習します。そして、今までの自分の思い込んでいた文字の形を見直します。

最も見直すべきなのは平仮名です。漢字から生まれた平仮名が、どのように形を変えてできあがったものかを確かめることで、平仮名の丸みを帯びた線の特徴や流れ方を見直します。

そして、いよいよ「浄書すること」に移ります。墨を擦り、筆を使って楷書でかきます。大切なのは墨の濃さ。やや濃いめに擦って、文字に力強さを出します。しかし、この「濃いめ」が曲者です。

一画一画丁寧に書いていると、結構時間がかかります。「察したこと」や「見直したこと」を確かめながら書くと、一時間で五、六枚しか書けないときもあります。一時間経った硯の海に残った墨汁はどうなるかわかりますか。そうです。水分が蒸発して濃すぎる状態になってしまいます。そうなってしまおうと、筆は流れません。もう一度墨の濃さの調節から始めなければならなくなります。これを繰り返していると、百二十四人分の卒業証書が完成するのは、二月半ば頃になると予想しています。

名前には付けた人の愛情や願いが込められています。生まれながらあなたが初めてプレゼントされたものです。数え切れないほど書いてきた名前でしょうが、卒業を機に改めて振り返ってみてはどうですか。